



徐翁雜著
二先生性復書



服部文庫
イ 17
2037



117
2037



莊子漁父篇春秋後不倫順天子諸侯之憂也蓋
古謂朝聘會同之事為春秋魯史所以名也晉者
盟主也記諸侯乘賦之事故曰乘楚務攻代比諸
侯惡獸故曰擣杙後儒不得其解迺謂錯拳春秋
以備四時非也孔子之前魯有春秋而孟子曰詩
亡盡後春秋作又曰孔子作春秋而亂臣賊子懼
作也者謂創作之也何也孔子所作儒者奉之為
經若夫前乎孔子者今左氏傳是也故謂之左氏

春秋而公羊穀梁則否故止以傳稱然則大事書之於策小事簡牘而已何也聘禮記曰百名以上書於策不及百名載於方謂辭命也杜預援以言國史非也然左氏傳有書曰故書不書之文何也讀孔子春秋者必據左氏春秋以識其事故亦稱傳而後人加釋經之辭也然則孔子春秋何以無名以別之古人簡牘為爾魯春秋定矣孔子何以更作春秋乎具二百四十二年行事而視諸掌非簡何能盡之滯乎細者務繁則惑觀乎全者者能

舉其大則簡則明雖然子貢曰賢者識其大非孔子何能識之且亂臣賊子所以文其罪者必繁其辭簡則不可得而飾矣故曰片言可以折獄春秋之謂也雖然春秋之有經猶史記之有表資治通鑑之有目錄而讀史記者不讀表讀通鑑者不讀目錄簡者之不及繁者也聖人之才與識後世莫能及之也

隱公元年春王正月

杜預曰周平王東周之始王也隱公讓國之賢君

也考乎其時則相接言乎其位則列國本乎其始則周公之祚胤也若平王祈天永命紹開中興隱公能弘宣祖業光啓王室則西周之美可尋文武之迹不墜是故因其歷數附其行事采周之舊以會成王義垂法將來是春秋首隱公之義也

范甯曰隱公之始年周王之正月也杜預曰凡人君即位欲體其元以居正故不言一年一月也

穀梁傳曰雖無事必舉正月謹始也

公羊傳曰曷為先言王而後言正月王正月也何

言乎王正月大一統也

按公羊以王為文王是其黜周王魯之說不可從矣蓋周室領正朔列國受而奉之故曰王正月春秋有正月而無王者迺其年周室不領正朔也所以領正朔者迺大一統也先王之制也非孔子所創也元者元首也人君之德也有人君之德而後可以居人君之位奉王正朔故先言元年而後言王正月也秦漢之後唯天子稱元年郡縣故也三代時凡言君者諸侯也故天子皆諸侯稱元年正者

政也政者正也奉正朔所以奉王政也不特奉正朔已蓋夏有夏之道商有商之道周有周之道也禮樂刑政世殊焉商不用夏之道周不用商之道是謂之正非若後世儒者徒取諸理以為正為人君之德所以法天也故不繫乎王禮樂政刑奉一代之制也故繫乎王不言王春而言王正月亦其義也程子不達乃謂以夏時冠周月安哉胡氏謂周不改時月孔子改之尤氏明曰王周正月則其安可知已周禮州長正月屬民讀法正歲讀法如

初可見正月建子正歲建寅矣

左傳曰不書即位攝也經稱公非攝明矣攝可稱公則伊尹周公皆王矣穀梁傳曰公何以不言即位成公志也焉成之言君之不取為公也君之不取為公何也將以讓桓也讓桓正乎曰不正春秋成人之美不成人之惡隱不正而成之何也將以惡桓也其惡桓何也隱將讓而桓弑之則桓惡矣桓弑而隱讓則隱善矣善則其不正焉何也春秋貴義而不貴惠信道而不信邪孝子揚父之美不

揚父之惡先君之欲與桓非正也邪也雖然既勝其邪心以與隱矣已探先君之邪志而遂以與桓則是成父之惡也兄弟天倫也為子受之教為諸侯受之君已廢天倫而忘君父以行小惠曰小道若隱者可謂輕千乘之國蹈道則未也公羊傳曰公何以不言即位成公意也何成乎公之意公將平國而反之桓曷為反之桓：幼而貴隱長而卑其為尊卑也微國人莫知隱長又賢諸大夫拔隱而立之隱於是焉而辭立則未知桓之將必得立

也且如桓立則恐諸大夫之不能相幼君也故凡隱之立為桓立也隱長又賢何以不宜立立適以長不以賢立子以貴不以長桓何以貴母貴也母貴則子何以貴子以母貴母以子貴杜預曰不行即位之禮為得之矣隱行公即位之禮而孔子削之萬無是理尤氏所謂攝者語隱公之心也孔子直據其事而不書即位屬辭比事春秋之教也故桓之惡自彰也非欲惡桓而故削之也隱公者繼室所生也以手文而立仲子為夫人是有二夫人

也礼所無也立子以貴不以長盖古語公羊引之
立子者包嫡庶也故以貴者謂以嫡也以仲子為
嫡惠公之過故公羊得惠公之心穀梁得礼之正
且世及者殷之道也隱欲讓其弟非周之礼也是
皆直書其事而義自彰也胡氏謂不受君父而自
立故削即位不通之論也

右保孫雜著也得手澤於其家而寫之

宋或曰為友乎亦曰亦字也中伊字孫字也右亦字亦
言表之復何也世孫之雜律謂在子也者二言皆上
先曰古者世孫之在孫曰世孫也者二言亦字為孫也
後曰古者世孫之在孫曰世孫也者二言亦字為孫也
世孫物也風俗上世孫也者二言亦字為孫也
世孫之在孫也者二言亦字為孫也者二言亦字為孫也
世孫之在孫也者二言亦字為孫也者二言亦字為孫也
世孫之在孫也者二言亦字為孫也者二言亦字為孫也
世孫之在孫也者二言亦字為孫也者二言亦字為孫也

座の諸報を中絶せしめ人稱せしむるは後証に云く諸澤に回復
 正徳の如しと一 是下子孫一以法心正の上言其可及言其
 存を刊行して其時刻を刻するは諸澤の如し信付に外に
 言まじ再托美仲法を多く守る事祈諸澤あり在暇伏乞
 承不乙

十一月十六日

答

是の如く教書の中美仲がとて其の如く法に守る事甚か
 海内におもひ給ふ事多し其の如く表に及ぶるは信に諸澤

打ふは志の如し其應に法に守る事甚か同之と云く為學業
 お績是下は諸澤の如し其の如く法に守る事甚か同之と云く
 之の如しと云く世子は各應に守る事甚か同之と云く法に守る事甚か
 且之は志に入らば其の如く法に守る事甚か同之と云く法に守る事甚か
 兼て其懐地下をもち其の如く法に守る事甚か同之と云く法に守る事甚か
 帝の如く是の如く法に守る事甚か同之と云く法に守る事甚か
 分る事甚か同之と云く法に守る事甚か同之と云く法に守る事甚か
 只若く其の如く法に守る事甚か同之と云く法に守る事甚か
 但来ると是下は其の如く法に守る事甚か同之と云く法に守る事甚か

幾回之句之句の暇待干鱗意于一等酒一五句是よ此
外之句若は送付之句は教は古く客教著は之句
法古人間有之句は信上之句は例は示すよ

一七之古詩換新之句は押新之例古人作中へ句
中へ信上之句は送付之句は必新と押之句は
之句恥入よは是之句は例は示すよ

一那ノ字何義要用之例多く又之句は思拙免之句は
例は上去二五ノ句は詩中へ例とあはし
采取之句は例は覺之句は指示す

一重字再美事お利削之句は中へ信上之句は重歌
男道雄之句は國備句之句は拙者之句は好之句は平生之句は
中へ一五之句は拙者之句は中へ信上之句は因陋恥
ノ句は重字之句は多分中へ信上之句は那
字重字之句は平生之句は信上之句は教は指
示すよは是之句は好

一送法之句は信上之句は内へ信上之句は例は示すよ
之句は信上之句は古人作之句は例多之句は必しも不可難之句
は信上之句は五絶之句は信上之句は教は示すよ

も世をあるも例をきくも後世あるも好むを好む
るといふと杜撰とあるは是下昔かぬると
例の二上事の中各々の齟齬之美句の二也
字も大中通則結と覚やれぬ付や中之美句の二
之を二句の二事之其為久波今一時際系塞責
作之杜撰とあるは其の衷と祀と事あり狐白袍
と中事も苦うるゆゑあり精利信用の古人例各
之を二も其を狐白袍と信之は得て二也其の衷
看作あると摺用と天南古微とや中事之二也

為某者之例未だ公義は従ひては事と下天南古
微の只通浪之言と五之は也

一傳教に通る事足下は委細は方々也其之其原義
と人の皮衣と略しては足るとも名も只あり生も
右之譯語は不必物之とあると思ふは然も是下信
難事も回復したる也其上地者一法を以て正
一上は是深あるも一と名地五智見板板供て二力
術も次第の中は下地は先思地は通る事あり
石存也地者待と云ふ事ありと事あり生も中

量よりふにおおのぬりある友と云ふ人におり人二人をたふ
大概碌おの若法に當り馬におのの史とて字つ也
いり不旋踵して蹉跌の患ふこと匠家の子方匠石運
介三枝と教る一孝して人と殺して一國を先光莊揚墨
等種に代辭尺とてを方外に在ひ先王の道と破るは皆云ふ
奇偉の人をたふ子に聖人といはれり百位園場之内に定めて
石をたふはたふとて一途に先王の道とておほひ人にお
信礼儀のまことおほいといふは後世の個人ま吾の改籍替
唐を極めて云ふ人のたふ放逐を慚の乱人といふ天作りの

たふ説とけいぬるはまこと唐の詩人も李白といふ云ふ
奇偉の人をたふ口口酒徒といふは碣石沈存の内におり
まは法外と犯す事及と得用するはまこと尺にお唐詩と評し
い人にお礼干鱗をたふことお礼のまこと人柄よくおはる干鱗は
一匹にお云ふ人のたふ尺にお唐詩は是に却るはまこと切る評
の如きの評述をまことおはるはまこと人の如く精く是法を彼二家
も詩と評すに皆まことおのたふまことおのたふまことおのたふまこと
いり事杜以下法をまことの評述は詩を極多くおはるはまことおはるはまこと
いり法外といふまことおはるはまことおのたふまことおのたふまことおのたふまこと

自然に出ずると上より入るといふ一室之内の事
古も天下の事からいふと大方人方の三獨をたのめ成物と
及ぶ自然三獨をたのめ及ぶ一人に就いては破りては唐詩の
非すとあて言ふ所ありて生人の詩とて先は法はとて此
味より調と上と強き□□□□□□直る上と強きと貴ひ
あつたる強き勅等よてもいふに担りては立る方と之美
取去取神後とPの王維の法はたそとPの王維
も詩の要久は法より作白字系改り詩斗前二句抑賦とP
Pの崔顥の玄鶴棲の詩ありて句物誌を津侍の法と欠之也

後世はと稱美し一可無感し例と難し一室之内の事□□
□世の選り足下と如く車聖次公字を海く者云々平生
と多き中法は向微微なき完全何れも一室之内の事と
不なき瑕ある詩と載られざる貴鶴棲るとの如く多古
の絶唱と云ふ所ありて口々に百韻とていふれども亦尚況や
詩中に載る詩人地考るとあると人々教多き方と生中
傍人の多傳えし詩とて多きとす亦和平生進取急ん
者も汲い名人を名出り才子の多きと世人を誇すも
この句も下り門下縁起の先とて五絶の如き来路

いと見えに論と斗なる者もあらずと物志すは俗人の畏れに
是れ只世間の人の言を眼子するにあらざるなり三人を
識具眼の人の言を論と見えたりと彼等の門下にては
の法を破ると言ひ此等歎くは俗人の望むるを消
しゆなると言ひては下にて書面にて彼等の望むるに
若くは世にても論中にて論議を構ひてありまことあり

是下の世法をわかれは俗人の言を是れ何れもかし切らずに物志す
あらずと通徒年の仇敵は内は先師の言を先師の言に偽^偽と
禦す且たえり也、縁の下のかたむやん何れも是れを言

みは世に言必止りて下り上は縁を笑ひては去るまじき
板りも何れも下り苦多しは此の味を成す所は俗人の
且物あるは天地神仏と指して世に言ひては言はるは
下と口口口は存全く言はるは元は書中にて口口口口
はるる言はるは言はるは言はるは言はるは言はるは
石板の言はるは言はるは言はるは言はるは言はるは
言はるは言はるは言はるは言はるは言はるは言はるは

十一月廿三日

右得字佐美明卿所写我之書而写之

